

理想の清浄を求めて

日本清浄会の旗手たちに訊く

金大 鉄男 (政掃編集部)

1998年10月、都内某所にて、学生運動団体「日本清浄会」の中核メンバーである藤守順子氏、国木田仁朗氏、そして演説のカリスマとして名高い一葉氏にお話を伺った。清廉な国家像を掲げ、若者の政治的覚醒を促す彼らの活動は、賛否を巻き起こしつつも確かな影響力をもって学生たちを動かしている。

——活動の理念をあらためて教えてください。

一葉：「私たちが掲げているのは、清く、正しく、美しい国です。そのためには、まず社

やった時のことを思い出してください。数百人が、清浄一心！と声を揃えた。あれが我々の力です。」

——内部には思想の分裂もあると聞きます。

一葉：「ええ、否定はしません。穏健派と急進派の違いは、方法論の違い。ですが目指している場所は同じだと信じていい。」

順子：「でも正直なところ、一部の劇場型のやり方には危うさも感じています。殉教者願望に近い人もいます。私は、継続的に社会に浸透する言葉と姿勢こそが清浄会の武器だと思っています。」

仁朗：「僕は、むしろ過激派に理解を寄せています。1996年組はやり過ぎた、と言われる事が多いです。しかし、日本の社会は、血を流すことを過度に恐れる。けれど、本当にこの国を変えるには、痛みを受け入れる覚悟が必要なんです。」

——では、今後の展望は？

会の隅々に潜む腐敗や怠惰を見つめ直し、私たち自身が変わらねばなりません。道徳の再生を土台に据えるのが、日本清浄会の本質です。」

国木田仁朗：「政治家も官僚も企業も、すべて清浄でなければならない。選挙のたびに期待して裏切られるのももう終わりにしよう。だから僕らは、声をあげるんです。時には、強く。1996年に出会った我々で。」

藤守順子：「私は声の強さの部分を支えてきました。チラシや抗議文、学内での座談会。ときにはテレビ局や新聞社への直接行動も。

一葉：「神話ではなく現実の力を示す必要があります。私たちは伝説になりたいのではない。社会の構造を変える力を、誰でも持つことを証明したい。」

順子：「私たちの中に、神などない。あるのは、日々の葛藤と決断だけです。その積み重ねが、いつか社会の風景を変えてくれると信じて。」

仁朗：「僕は……彼女が歩む道を見届けたい。それが僕にとっての希望です。」

1998年の秋。大学構内で行われたこの取材の翌月、政掃編集部には匿名の脅迫状が届いた。内容は明かせない。だが、確かにこの運動は誰かの脅威になっていた。それが意味するものは——

やり過ぎと言われても構いません。届かない正義には、意味がない。」

——活動方法は時に過激と報道されます。赤ペンでの落書き、仮面姿での突入など。

順子：「メディアがどう捉えるかは自由ですが、私たちは暴力をふるっているわけではありません。象徴への働きかけをしているのです。腐った企業のポスターに印をつける、それが市民の抗議だと私は思う。」

仁朗：「若者はよく無力だと笑われます。だけど、渋谷の交差点で若者浄化パレードを

